

# ロールプレイ法の環境配慮行動促進効果に関する研究\*

*An Study on Effects of Role Playing on behaviorl change toward Environmental Conservation\**

松村暢彦\*\*

By Nobuhiko MATSUMURA

## 1. はじめに

地球温暖化問題は、原因者が多岐にわたるとともに、大きな被害を受けるのが将来世代であることに特徴がある。したがって、問題を自分のことと捉えて常日頃から環境負荷の小さい行動をとる動機づけが困難なことが多い。「thinking globally, acting locally」の標語にあるように一人一人の環境汚染行動の抑制が必要であることは理性的には理解できるが、実際には「自分一人だけしても変わらない」とか「自分だけじゃない」というような対処有効性、責任帰属の認知の低さからなかなか行動には結びつかない傾向にある。

環境対策の一つのアプローチは、環境税のように環境汚染行動に対して、外部不経済の内部化の観点から、環境負荷に応じた料金を課すような構造的アプローチがあげられる。もう一つは、環境に配慮した態度を形成し、環境配慮行動を導く心理学的アプローチがある。実際には、これら両方のアプローチを合わせて社会システムに組み込んでいく必要がある。しかしながら、これまでの研究は構造的アプローチの効果、評価に重点が置かれてきたのに対して、心理学的アプローチについてはまだまだその効果の検証が不十分な状況にある。社会心理学における実験的研究成果を現実社会へ応用していくためにも、後者のアプローチの効果を実証していくことが必要とされる。

そこで、本研究では、心理学的アプローチの一つの手法である、ロールプレイ法（設定された環境問題に対して、日頃の個人の立場とは関係なく、与えられた役割を演じる方法）による環境配慮の態度、

\*キーワード：心理的方略、ロールプレイ法、環境配慮行動  
\*\* 正会員 博(工) 大阪大学大学院工学研究科土木工学専攻  
(吹田市山田丘2-1 tel:06-6879-7610, fax:06-6879-7612  
matumura@civil.eng.osaka-u.ac.jp)

行動変容の効果を実証的に検証することを目的とする。

## 2. ロールプレイ法とは

社会心理学における代表的な行動理論である態度理論は、行動の背景にある様々な心理要因と行動との関係を記述する理論体系である。心理要因の中でも中心的なものが態度であり、その定義は、Allportによる「態度とは、関連するすべての対象や状況に対する個人の反応に対して直接的かつ力動的な影響を及ぼす、経験に基づいて組織化された、精神のおよび神経的準備状態のことである」というのが最も広く受容されている。態度と行動の研究を進められていくと、必ずしも態度と行動が一致しないことが明らかとなり、態度と行動の中間的な心理要因である「～しよう」という行動意図が仮定されるに至った。

様々な心理的アプローチは、態度理論のどの要因を活性化するかによって、分類される。そのなかでもロールプレイ法は、態度と行動意図の関連性を活性化することを目的としたアプローチである。これは、個人が環境配慮の態度を持っていたとしても、環境配慮行動をとるかどうかを決める時に、その態度が想起されて、個人の行動の意思決定プロセスに組み入れられなければ、態度に一貫した行動はとられにくいことに基づいている。

ロールプレイとは、設定された課題に対して、日頃の個人の立場や考え方や価値観とは関係なく、与えられた役割を演じることで、その立場にある人の考え方や信条などを理解し、日頃の自分とは違う様々な立場や価値観が存在することを認識することを目的としている。そして、より広い視点から、よりよい問題解決のための方策を生み出すことができ

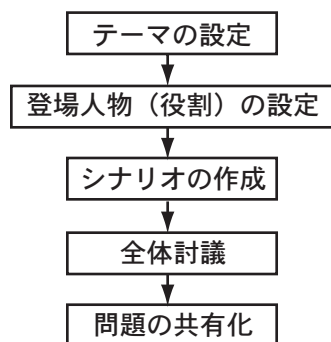


図-1 ロールプレイの手順

るようになる能力を育成する。例えば、点呼時を利用しての安全のスピーチや月間安全目標の唱和は、このロールプレイ法の効果をねらったものに他ならない。

ロールプレイ法が態度と行動を一致させることができるのは、話す内容は自分の信念であり、その信念を聞き手側に伝えるて納得してもらうように話すためには、どのような構成にすればよいか話さなければならないプロセスにある。その結果、話の内容に対して注意が増大し、参考にした資料を自分の言葉に直す言い換えの効果、説得性を増すために様々な論点を付加する創造性の効果により、発言内容が自分の信念へと変化するためと考えられる。

そもそもロールプレイ法は、JanisとKingが、予め調査しておいた被験者の態度とは反対の立場で、聞き手に納得させるように話させることによって、当初保持していた態度とは反対に変容させることを発見したことにはじまる<sup>1)2)</sup>。それ以降、集団療法や心理治療の分野において応用され成果をあげてきた<sup>3)</sup>。その後、このような文脈を超えて、コミュニケーション研究など幅広い分野で発展してきている。環境配慮行動については、Horsleyによって環境配慮行動を家族にとるように説得する役割を演じることで環境配慮行動、環境配慮の態度をとるようになることが示されている<sup>4)</sup>。また運転者教育の実務では、事故多発者を安全管理者に任命することによって、交通事故を大幅に減らすことができることが確かめられている<sup>5)</sup>。

### 3. 実験

#### (1) 手続き

大阪大学工学部土木工学科の学生を対象に、ロー

表-1 ロールプレイの役割

班	A班	B班	C班
役割	国 自動車メーカー 産業 環境NGO 国民 将来世代	環境省 経済産業省 企業 環境NGO 国民 将来世代	環境省 環境先進国 経済産業省 環境団体 市民 将来世代

表-2 観測変数

変数	質問
環境配慮行動	テレビの主電源や電気のスイッチをこまめに消す 冷蔵庫の開け閉めの回数に気を配る 冷暖房をコントロールする 節水をこころがける 不要品を買わないように計画的に物を買う 食品は賞味期間中に食べ、ムダに捨てない 買い物には買い物袋を持参する 修繕や繕いをして長く使う エコマークに注意して商品を購入する 自転車や公共交通を使う 上記10項目について、「いつも実行している」から「全く実行していない」までの7件法
環境配慮の行動意図	環境配慮行動の10項目について、「いつも実行しようと思う」から「全く実行しようと思わない」までの7件法
環境配慮の態度	地球温暖化問題の環境リスク認知、地球環境問題の責任帰属認知、対処有効性認知、実行可能性評価、便益費用評価、社会規範評価の各項目について、「全くそう思う」から「全くそう思わない」までの7件法

ールプレイ法を行い、彼（女）らの環境配慮に対する態度と行動の変化を把握した。3年生（38人）の土木計画学演習の時間を用いて2001年4月19日から週に1回90分づつ、4週間にわたって次のような手順でロールプレイ法を実施した<sup>6)</sup>。

#### 第1週目：ロールプレイの手順の説明

まず、ロールプレイ法を実施する前の環境配慮行動と環境配慮の態度を質問紙票により把握した。その後、一般的なロールプレイの手順と注意事項について説明した（図-1）。テーマの設定では、専門知識を有しない一般市民を対象に実施する場合には、できるだけ身近な問題が望ましいこと、あくまでも仮想状態であるため、設定条件はあまり厳格にしないほうがよいことをつたえた。役割の設定では、問題に関係すると思われる役割を5～6種類設定し、しかも賛成派と反対派がどちらかに偏らないように

配慮する。シナリオの作成では、設定したテーマを肉付けし、各々の役割の立場や主張を想定する。具体的には、与えられた役割の基本的な立場を確認し、その人の立場になって、どんな考えや意見なのかを整理する。そして、全体討議の時、どんな主張をすれば相手を説得できるか考える。全体討議では、各役割の立場と意見を順に表明していき、一巡したら全体で自由討議する。そして最後に、KJ法を用いて問題の共有化と問題構造の解明を行う。

一連の手順を、A市中心市街地の道路交通問題を例にとり、示した。

### 第2週目：テーマの提示と役割分担の決定

一つのグループが12人前後になるように、3つのグループに分けて、国内の地球温暖化対策をテーマとして提示した。その後、役割と分担を各グループでのディスカッションで決めたのちに、役割ごとに集まって、役割のシナリオ作成を行った。各グループごとに設定した役割は、少しずつことなるが、将来世代は地球環境問題の被害の特性からこちらから必ず入れるように指示した(表-1)。時間外にも自分の担当する役割の立場に関して、図書館やインターネットを用いて参考資料や文献を収集し、自分の立場の根拠付けを行うよう指示した。

### 第3週目：全体討議

グループあたり25分間の時間を割り当て、A班から順番に全体討議を行った。まず、各役割の立場を表明したのちに、その後ファシリテーターがディスカッションのきっかけを与え、グループ全体で自分の担当した役割にそって、自由討議を行った。この際には、ディスカッション中の発言内容をKJ法に用いるため、別のグループの班員が紙片に書き留めておいた。

### 第4週目：KJ法による問題の共有化と問題構造の解明

各グループに分かれて、全体討議で出された発言内容を書き留めておいた紙片にさらにブレンストーミング形式で意見を追加して、国内の地球温暖化対策についての意見を出し合った。このときには先週行ったロールプレイの役割からは外れて、一般

的な視点をもつように指示した。その後、これらの発言内容をもとにKJ法を用いて、問題構造を明らかにし、文章化を行うことで、問題の共有化をはかった。最後に、最初と同じ内容の質問紙票によりロールプレイ実施後の環境配慮行動と態度を把握した。

その後、1年経過した2002年4月18日にも同様のアンケートを実施し、態度、行動の定着度を把握した。

また、統制群として2年生(42人)を用意し、3年生と同日に環境配慮行動と環境配慮の態度を質問紙票により把握した。

### (2) 変数と指標の設定

質問紙票で把握した環境配慮行動と行動意図、環境配慮の態度は表-2の通りである。とりあげた環境配慮行動は、節電、節水、省エネルギーのライフスタイル10項目をあげて、「いつも実行している」から「全く実行していない」までの7件法で質問した。環境配慮行動の行動意図は、同様の行動について「いつも実行しようと思っている」から「全く実行しようと思わない」までの同じく7件法で質問した。環境配慮の態度については、地球環境問題の環境リスク認知などの6指標について「まったくそう思う」から「全くそう思わない」の7件法で質問した。以降の分析においては、各質問項目の平均値を各変数として分析を行った。

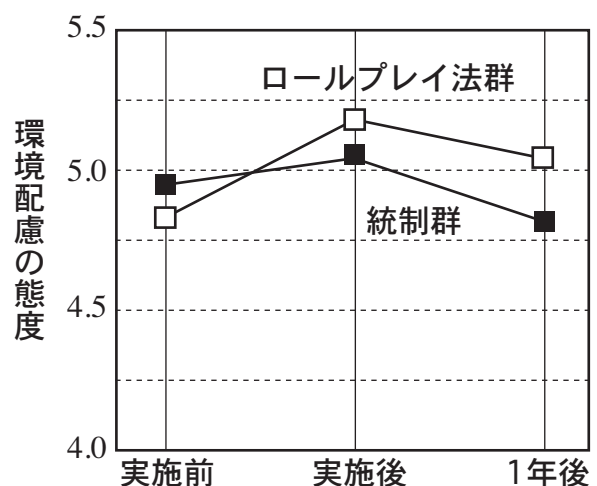


図-2 環境配慮の態度の変化

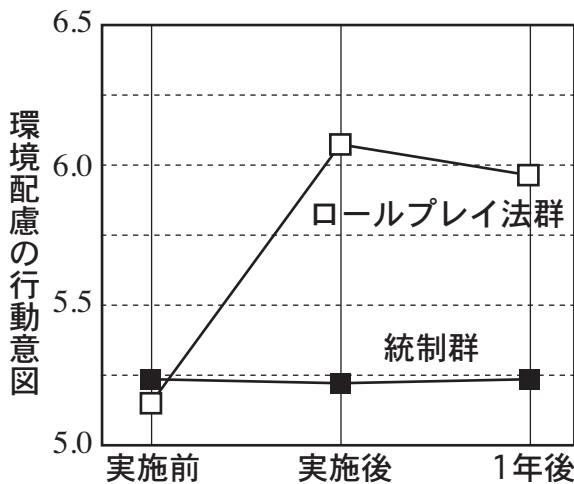


図-3 環境配慮の行動意図の変化

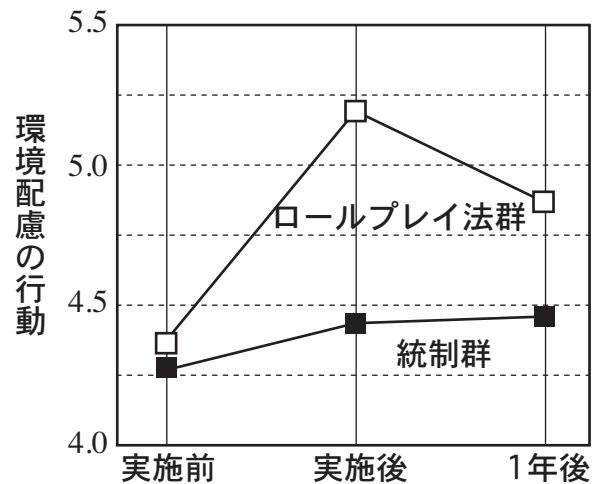


図-4 環境配慮行動の変化

#### 4. 結果と考察

##### (1) 結果

環境配慮の態度の平均値については、統制群が実施前後で約5.0と一定であるのに対して、ロールプレイ法群では増加傾向にあった(図-2)。しかしながらこの変化は実験群間で有意な差があるとはいえなかった。これは対象が大阪大学土木工学科の学生であるため、環境問題に対する知識や問題意識を比較的持っていたと考えられる。

環境配慮行動の行動意図の平均値については、統制群が3時点通して5.25前後で一定していた(図-3)。それに対して、ロールプレイ法群では、実施前は5.2と統制群と有意な差がなかったにも関わらず、ロールプレイ法実施後は6.1にまで上昇し、その1年後でも若干減少するものの、5.9と効果は持続している。そこで実験群を被験者間要因、実施時期を被験者内要因とする2要因分析を行ったところ、実施後と1年後のロールプレイ法群と統制群の間で5%で有意な差があることが明らかになった。

つぎに環境配慮行動の平均値についても、行動意図と同様に統制群では実施期間を通じて変化がないのに対して、ロールプレイ法群では実施後向上している(図-4)。また、1年後の行動の継続性については、行動意図と比較すると効果は減少しているものの、統制群と比較すると高い値を示した。同様の2要因分析を行ったところ、実施後は5%、1年後は10%で有意な差があることが明らかになった。

##### (2) 考察

以上の結果から、心理学的アプローチの一つの手法であるロールプレイ法は環境配慮の行動意図と行動を高め、しかもその効果が1年後においても継続していることが示唆された。ただし今回の結果は、対象が大阪大学土木工学科の学生であることから、対象者が比較的環境配慮の態度を持っているという前提にたっている。環境配慮の態度を形成していない人に対しても同様の効果があるかどうかは、対象を変えて追試する必要がある。また、ロールプレイ法は、近年ワークショップ形式で実施される機会が増加しているとはいえ、この手法は、働きかけに時間や手間がかかる。したがって、環境活動を実践するコアメンバーを育成するような場合には適した手法であると考えられる。

##### 参考文献

- 1) Janis, I.L. and King, B.T.: The influence of role playing on opinion change, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, Vol.49, pp.211-218, 1954.
- 2) King, B.T. and Janis, I.L.: Comparison of the effectiveness of improvised versus non-improvised role playing in producing opinion change, *Human Relations*, Vol.9, pp.177-186, 1956.
- 3) 和田宏之: わたしの若年運転者指導, *月刊自動車管理*, Vol.9, No.8, pp.19, 1982.
- 4) 金子賢: *ロールプレイング入門*, 学事出版, 1992.
- 5) Horsley, A.D: The effects of a social learning experiment on attitudes and behavior toward environmental conservation, *Environment and Behavior*, No.9, pp.349-384, 1977.
- 6) 藤村コノエ: *環境学習実践マニュアルエコ・ロールプレイで学ぼう*, 国土社, 1995.